

都立高校と東日本大震災の被災地をつなぐ

「NPO法人ピアサポートネットしづや」と「都立広尾高校」

■ 被災地の中高生と会いたい



アジのメンバー

NPO法人ピアサポートネットしづや(以下「ピアサポ」という。)は、渋谷区を中心として、子供たちや若者の居場所づくりや自立のサポートをしている団体です。都立高校の教科「奉仕」にも、ずっと関わっていただいています。

都立広尾高校は、今年度の奉仕の授業について、ピアサポと相談しながら、東日本大震災をテーマにした内容にすることとしました。最初に、ピアサポ代表の相川良子さんと、被災地での支援活動を行った石川隆博さんの対談を行い、高校生が「自分に何ができるか」を考える授業をしました。5月11日の朝日新聞に掲載された「いま子どもたちは 震災を生きる」の記事を話題としたところ、翌日、先生がその記事を生徒全員に配布しました。岩手県大槌町の高校生グループ「安渡(あんど)青年協力隊(通称:アジト)」が、避難所となった安渡小学校で様々なボランティア活動を行いながら、「ふつう」に生活しているという記事です。何が



できるかを考える授業を受け、そして記事を読んだ広尾高校生からは、「メッセージをアジトに渡したい」、「ぜひ交流したい」、という声があがりました。ピアサポは新聞記者に連絡をとり、アジトのメンバーと会う調整を始めました。

広尾高校では、その後も東日本大震災に関連する内容の授業として、ピアサポの協力を得ながら、6月8日に「原子力発電のお話」、6月22日に大学生による「ダンボールシェルター体験」の授業を実施しました。

■ 高校生の思いを実現するために

石川さんが6月に岩手県大槌町を訪問。アジトの代表の佐藤君に広尾高校生のメッセージを渡し、地域の様々な方たちと調整する中で、

炊き出し活動もすることになりました(日本財団ROADプロジェクト「東北地方太平洋沖地震 災害にかかわる活動助成事業」として実施)。ピアサポのメンバーを中心として現地での炊き出し活動を2回行い、関係ができたところで、広尾高校生に夏休みの活動として夏祭りボランティアの参加を呼びかけました。安渡小学校の避難所が解散することとなったので、お祭りを行おう、という提案です。



岩手県・大槌町の様子。



避難所となっている安渡小学校の前で顔合わせ。



手つきがよくなって、会話もできるようになった。

■ 大槌町で活動しました

広尾高校の高校生7名と先生2名が参加し、東京からバスで大槌町を訪問しました。釜石や大槌の町は、がれきが積みあがり、その中を雑草が茂る風景が広がります。安渡小学校の校門で、アジトのメンバーと初顔合わせ。早速、模擬店の準備にかかります。高校生は、焼きそば、焼き鳥、とうもろこし、カキ氷の担当として、汗だくで取り組みました。次々と地元の皆さんが集まり、できあがりを待つ長い行列ができました。

避難所の子供たちが高校生と大声を出して遊び走り回る姿を、地域の方が「あんなに、笑ってねえ。」と、うれしそうに見ています。ドッジボールで遊び、あっという間に4時間がたちました。アジトのメンバーとメルアドの交換をし、「また会いたいね。」と声を交わしながら、帰路につきました。

高校生からは、「時間をかけてバスで来たが、そのことで東京と大槌がつながっているという実感をもてた。」「がれきを実際に見て、言葉を失った。がれきが怖かった。」という感想がありました。

■ 継続した活動として

広尾高校では、2学期の奉仕の授業で大槌町で活動した高校生の報告を行うとともに、1学期に続いて大学に協力していただき、直下型地震が起きた時に校内の教室や体育館などではどのような危険があるかを、小グループで調べ話し合う授業を実施します。

また、夏休みの大槌町での活動では、祭りの作業に追われて高校生とアジトメンバーが交流する時間を充分にとれませんでした。この反省を踏まえて、ピアサポでは高校生と一緒に大槌町を秋に再度訪問し、震災体験を聞き、ゆっくりと交流する会の準備をしています。この会の内容については、アジトのメンバーにもアイデアを出してもらいました。そして、アジトのメンバーの東京に行ってみよう、という声を受け、ピアサポではその実現に向けての検討も始めました。東京での交流プログラムについては、高校生にも協力してもらう予定です。

夏休みの活動に参加した高校生からは、「アジトのメンバーと、一生の友達になりたい。」という言葉がありました。この言葉の重みを受け止めながら、広尾高校とアジトをつなげるピアサポの活動は続いていきます。

石川隆博さん(ピアサポートネットしづや)

これまでに、中高生の夏休みの交流活動の企画実施を行うなど、若い人たちの体験活動の場づくりに関わってきました。今の中高生は、自分の知らない世界を知る機会、自分の刺激になる出会いが、学校生活でも日常生活の中でも少なくなっていると感じています。

今回の広尾高校の授業では、被災地の状況を報告するとともに、被災地で「特別なことではなく、「ふつう」を意識している」中高生を紹介しました。この記事から、広尾高校生が「メッセージを渡したい」、「会いたい」、という新たな動きを見せました。授業で話している時も、高校生の目の輝きがこれまでとは違いました。大人はこの思いをなんとかして実現するしかありません。大槌での活動に参加した高校生には、自分たちが体験したことを多くの人に伝えてほしいと思います。それも、ボランティア活動の大切なことです。そして、これからは私たちは、アジトのメンバーを応援し、地域の町づくりをみながら、顔の見える関係の中で、できることを行っていきたいと思います。



今後の広尾高校の授業には、防災について学んでいる大学生にも引き続き参加してもらう予定です。地域で自分たちができる防災活動について議論する授業を実施し、地域の安全に目を向けながら、社会生活で必要となる「協議し、合意形成する」という経験となる機会にもしていきたいと思っています。

今後の広尾高校の授業には、防災について学んでいる大学生にも引き続き参加してもらう予定です。地域で自分たちができる防災活動について議論する授業を実施し、地域の安全に目を向けながら、社会生活で必要となる「協議し、合意形成する」という経験となる機会にもしていきたいと思っています。



焼き上がりを待つ列ができてきました。



メルアド交換中。